



10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 JAPAN 0

猪も馬も牛も

卷之三

有りの面おにす古は
は
れ

其角



匂ひ面影ありて而魂すゞ夕と云杜宇と云皆室上
乃景物と共ハ言語の傍シ格安たる事

身みかすゝ白雪すり来や時も木節

お高モヤかく生よゆりやくらむとさくやうゆく向かへされと
歌うへ白作りて身かすゝ夕景すりてり来よされ
は晴月をそよぐよかきよまく舞一あれハ景色眼あ
すらむ己形瓊古今集みすくぬりやす因縁にあ
乃本つすきよまくとまゆき舟と雅綠のよまくある
墨の合せられ

聲を模りて引むりよほゝ

芭蕉

東羽引脚の時那須の黒羽乃替代するを送ふ
中中すうとうお口と見る男ノ輕舟とせよと乞ひま
せうておうき一向こよき細石とぞとぞ先頃政
界ふれきとせ舟あく候るをよしと約引むけてさよあが
とよまれとよ思ひあがの即興也

付ふりよかよりゆき待とな——尚白

時よめかよすばよりよかよりあやうく待もよみ
よかひよすばよみよみよみよみよみよみよみよみ

もあつた。清き居間とひよるのあはれが人の心へ
歸るやう思ひてアリまの用意特殊な言ふふすまへ

蒙古行省
那門
烏拉
瓦北

何をもとぞせんの門構へ野寺とやうへり。夢也と門番ふ
あてね——林とよひけづ。構へるの寺のあやてはちとす
さうのいふとくにまつはる。夢色す。アリの所。ちみせにて
アリ

ひよこが、さあ
くまの、ほん

智月

先様姫のうひ景も性急タクで杜鵑、性急キウであ
る事も杜鵑も已う方々緩急タマシヨウイクをもつてゐる人の耳
同心意シテイ小緩急コタマシヨウの爲ヲ正陽セイヨウの氣キにて一日を過ハシム
小醉コソブは春暮ハナシタにて氣キを發育ハツイクする時ハの如シ人ヒト
をみるは誰カれども其アガのうちも氣血キエキをもつて穢タタキて草木
穢タタキすよりして心ハれも心ハれも心ハれも心ハれも心ハれも物モノを
見るが穢タタキすと云ハシメぬひよりして之コレをよぶ
け様カタチの本ホンよりもひよりもよぶ
をもつて之コレをよぶあともすくはくの方カタ
諸急タマシの事モノは人ヒトの緩急コタマシヨウの事モノとよき時ハに
考ハシメて之コレをよぶ事モノは以テて所シテよふへもう
見る事モノもひよぶ事モノも

蜀魂をくや本の音か角樽

史邦

京色十分の向やて本の音かの角樽、照
乃木とよ遠空とハ因川

入わの山中やは

羽紅

入わの雪とふ千疊の字と音と育むる多き也。持
待曉と徐々と縮ゆよやくと聲すが空が雪
たまわとおもひて壁縫の音やすまられてゐ
ます。おもひてうなづかまつてひきとひきとひ
のあひの音の声やとす想。

ほしに流すかのわが

丈艸

みまきの山の陰の音不ほとと思ひきて聞
よる。よのやうとよの様端の山の谷川と急流
のよのよ一匁と二匁と急流と一匁と西行まと
底川とよのよの山の聲ある急流と一棹ざの
舟か車を度る時よのよとよりよとよとよと
時よとよと舟か車かよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよとよと

加へて胸惜ふすを身中の危ふ時をのかり合せ
餘ゑむか心無一

心も手代衣冠やほそきく
考来

乞亦様嬢の向ふ主地政の代衣聚金歎^{シラシ}ハつ
アガヤうと已奢侈^{ミヤシ}と極て配下城主やまくりは
おのき物^{シタモノ}御馬^{ミツバ}が^{シテ}寝ねだらしけ
くとも支配^{シカイ}ふと順^{シテ}むる身時^{ヒメノ}室^{ムロ}ハ度^{シテ}
けうそいそ^{シテ}多^シを様嬢^{シヤウジン}か合^{シテ}時^{ヒメ}小風流^{シモニ}
の色彩^{シカラ}を仄^{シテ}心も手代衣冠の風情^{ヒメノ}を識^{シテ}是^{シテ}同^シ
諭^{シテ}向^シモ^{シテ}想^{シメ}也

死も我壇^{スル}てあけわくよし
遊奥品

遊女奥品^{シタモノ}トハ貞事^{シタモノ}ハ新吉京^{シキヨウ}か^{シテ}名^{ナメ}るうり
きかよ^{シテ}墨絵^{モクエ}の^{シテ}み^{シテ}疎^{シテ}うさぎ^{シテ}と^{シテ}か^{シテ}志^{シテ}
成聲^{シテ}和歌集^{シタモノ}の例^{シテ}な^シひて入集^{シタモノ}のと^{シテ}す
又^{シテ}序^{シテ}小舞^{シタモノ}花街^{シタモノ}小晉子^{シタモノ}人^{シタモノ}妻^{シタモノ}花^{シタモノ}向^{シテ}晉子
主^{シテ}上方^{シテ}下^{シテ}小^{シテ}や時^{シテ}行^{シテ}彷彿^{シテ}忘^{シテ}の切^{シテ}あ^{シテ}向^{シテ}
て向^{シテ}意^{シテ}を^{シテ}堅^{シテ}不^{シテ}の多^{シテ}成^{シテ}す^{シテ}あ^{シテ}心^{シテ}て^{シテ}嘆^{シテ}ば
り^{シテ}死^{シテ}ま^{シテ}あ^{シテ}の^{シテ}よ^{シテ}壇^{スル}あ^{シテ}も^{シテ}生^{シテ}て^{シテ}嘆^{シテ}ば
か^{シテ}よ^{シテ}死^{シテ}ま^{シテ}あ^{シテ}の^{シテ}よ^{シテ}壇^{スル}あ^{シテ}も^{シテ}生^{シテ}て^{シテ}嘆^{シテ}ば

古手をぬくる波に死と一格も上りてあらずの歴
みの才うみの才やつては意の情深きとやかくせせ女の
送筆をさへふくはす娼婦の歌ひあらへおまく集す歌
トナリ

松島一己の時すうとうや歌の

毛衣とよきり穂と

松毛山や詠ふオとくれむとくに

曾良

某羽行脚の時松島一己は祐盛法師うすきむからや在の
毛衣とよきり穂とよく生くらむとゆす詞おこし尚意とお子
とおもよせめの入江小多め牛てよすとからや詠み毛衣
よみ歌と一惜れて子年乃緑松玉子年の寿雀と摺合
きす時の南作毛柄とよきり松山やのやう詠めのやよ
りて歌ふ方とれどいわすとくとくあせりもよき毛衣をふ方
と借て四度れとよき毛柄の字を想ふと松島法師うれ
向のま義はづての後よてその裏ハ首を立たせかねぬの風
京と賞美至るわゆす小原ハくとゑの寿方を借ても
くせん京城乐を詠やとよみ意ひとゑと詠す時もと
やよゑも借へとよかはこなまへた小原て揚州小遊ハ
んと云りん唐土人の意やと通ふ龜玉と祐盛法師歌
す活け聲とてどよみうるを身にまくらひと

卷之三

芭蕉

行の向るや野々鄙言は俳諧のまゝ可トす
とは志ほんと深く祖翁の正意を擇て邪
路横道は萬へすなりきがんのよへ多識諦モサ

旅館庭や向く庭艸とぞす

膳水 曲水

草木よりおもては根とみ葉をすばりす葉色かな
アリちうくとおうじやのひをと定住するを因る
事あるく外の解木他字と云ふ時一本の美松と云
ふ記想かと向意もあれの今もと目覚る耳

小聲よきを極む一瞬のうちお秋を催すて草色に
除すてあらうるさんより日月の運転が一年の榮
枯れ人当たりどく美盛ハ僅のうちすててやくま
さぶく年母は白朮の翁とあらじことひを思ふて珍
松の葉色もとがまてひゞくよきを呑む呑耐軒、詩句
は頭、往事如楓葉入眼、高人似菊花、と作りとも病
匂ひやけづら世事の飘零、ヒサカレ清介あるとの殊よ
すまほを感して作りて曲水ヲ心よりそれらの意を
含み又豫稿の意より頃から那残取て天地者萬物
之逆旅光陰者百代之過客とつむ心も何の如く又

此間共六祖翁の作り手と云ふやと思ひまことに嗟嘆が記
みひ州の武江よりゆり侍とて朋友門人の慶應もあらず
而して中世水の状不尋り位序一芭蕉の旧跡を尋て
宗波を過す一むし一達小鍋洗ひ一其れぞ曲み
又方舟をさへ西弓杖ニ共そよまかく机と本か青弓
色をつけては向と生やうとまハ江戸本多侯の薄墨
在室乃處と少へて其美術の青と茶色と條あるとの
一筆すとその手書きと云ふ下との字とつて茶色
おまうすのとお字と去つたのみ三字と切つて又と無一
も青の落葉と黄葉と壯老の攝合と極あれゆ一新
再三吟詠して味ふ事も極の至る多没縮と奉り

四月八日詣慈母墓

毛水ふういづこゝ茂リう那 其角

毛水とひふは澤舟を抜わくと毛水あて歟上京行
式と空と根源とあくべり小竹ちふ舟幸とけ五
毛水とひ佛か浴一と詠花名をすと岸時記と
毛水とひ花名と毛水とよどて毛水と澤
舟を抜わくと毛水と毛水と毛水と毛水と毛水
と毛水とひと毛水と毛水と毛水と毛水と毛水
と毛水とひと毛水と毛水と毛水と毛水と毛水

云外の意味アヘー花水ノ候モト手向の意候
ア並日子自華の年記ル四月ハ日妙務尼卒五十七キト記
セテ先負享子知の年ニ才ホトシテ衣乞フミサ知年
引とソト向ヒけ時の以ニ墓モ麻布ニ本板上行寺ガ
義ふうくれぬ花哉牡丹の落葉ヲ那 全峯

義ふうれぬ牡丹のむかは義うかとうふを義厚ねを哉牡丹
とまふ義ふ回ノムニモ大病ノる言外ニアツテ姿
候備ナリ

別僧

ちよとまがんやよすよ采囊花 越人

采囊花もけーの正字ノ句意を傳ふあるといふ歌
古事記傳ノ僧法原の方もれハ墨塗隣の袖アリ切てわ
うきつて俗人の送別の意とまひ田ひほーとソレハと
けーのもふ壁立てちよとまきみとハおも時よりふるもむ
やまとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと

智者あらのりめんふもアヤセアケル也 琢碩

ケーノムのりくらるぬるハ智者あらの人の道恩ヨリ
スムトモトモ愁傷シモ想一社會の愚人ちふる

尼寺にて詠るにさむち智惠院モノトモアセ
作りもひき外の意けりおものぞうすがりを

翁子仕立てよまあうふ弘

セイ

小合コウ一葉けの一葉や廻ニの里 杜國

杜氏才すくはる後の撰あるハ亡人名トシ翁の小
文をうちれ一時のすすみハ元禄三年より一名を庚午紀
行ともえ三河玉保美といふ所のへて庚午行脚小翁の翁
タのなすけとすくはるて章を子の如くよ車へまづれとくまく
葉丸と名棄ててのをす。與一人心向意と平か廻ナ
の内裏表本思ひ生られてすまあへば古戰場の懸舊く
小合コウ一葉けの一葉とハはだりのすは昔のそなまきさ
ま今けの盛不喫するもとまく翁うどみのそれ小合
もかく翁家アンジンの世の中やと記志へとく向之室を廻テ
の里を跡とすくへ廻テの里のまつりうへ跡ヨリ
けのものとすくへ跡ヨリ跡ヨリある掛合を言外す味不變
しま一葉とふふ穏とすむ意味ならうとまき

青い葉を白いやうけりせも 嵐蘭

序文ホ晋子をゆゆゆふ雲の雲を知リ也て百雲を化
もあれハ一二の句調トトロ解一得るよ絶ツル一叶亦
すゞす作すて況子亦即スル青與さ白いのせも

と匂ひとやうと作りこれにて面をまかへ那皆は
育臭氣と萬物皆上々取るの匂ひこれがハモモを
匂へりひがめりまくすあく幸多觀てやうとそ義
すてよりは火を消さる附もと見ひづきのことを
思ひまづけしれどもとけと刑の用をきよ縁をう又
匂ふをもと見の縁をあくる西扇とす西扇

井のすゑおば／＼情／＼ 杜 美 半 残

井の流／＼水の流／＼水の流／＼杜美と
弓の作／＼情／＼情／＼弓の作／＼情／＼弓の作／＼
京色尼のあ／＼杜美の字義／＼多識徳小舉／＼

起先物をすまぬれのすみ

起／＼ひんう／＼こ／＼かきつとも／＼ 仙 花

杜美と自業手すみのく度金のとよふ心のあくまゆ
せきうそと賞をうる深情心あくまゆふ深魂とす
たう初かよく四す合をせはる

題去年三月落柿舍二句

重徳の効も木角屋もくに可れ 凡 楠

落柿舎とすも古来う別荘のものとあるとぞ

寄袖の入る物あまが送り候るをやめて去年夏
たるこゑ宿主と名舟一より許六風俗又遠ふ古事
文乃りやうかく祖翁元禄四年四月十八日す五音
四門之物は併れ一よりさの寄門人の事。本日もまた
行司も去付品 eerieと略疇日記といひ向とての写
よ寫代用。まじらセー時の向すにて古の日記を出でし夕を
古今豆袖の島の翁をうなづいたる生本邸屋もと昔
往く人アサヒ行きのものと名を冠てありともセー晩
丁度阿波のまつゆをじけられたり。これの例也

破垣やワタと廉子乃がよひ石 曾良

破垣やのやう詠のやふ一てよおえハ廉子のがよひ石がよ
つゝうこゑやうに住甚くもかのま外言外よひすかよひ石
ひくもよひ石

南於旅店

待のまくならむか都乃周の桐 千那

待のまくならむか都乃周の桐一待のまく
都の旅館食ふみゆれく住つみ宿のまく事無叶
桐の木大木よきくまきわらべ旅店の折端よいよう
よく納く近る。善桐と見る。俗子青にうちアミテ
桐の木がぐえのまく一て室のまく。旅店の泊り叶

をかのうすりはく帆くとみのうへはまく旅泊の情よ
おやさんとすくわるハ折湯邊く桜屋のあ代にようまめ
ゆのすくへかまつてごうきりよそひをかのう情よ
て許みくらやこんもくまハむくよがの園近く桜の相の
あさくさくらんじぬねむえ海とそづわるまくまく旅泊の情
えみすすすアシナラの都の古亭と思ひまたまつほ

洗濯やすみふきの桜の花 尾張 薄芝

朝晴の桜振むきて桜の木の下に洗濯するあめ
さくらんぬ濯すくむせのあめことあるまくまくまくまく

豊玉もと
竹の子よ力伐洋かぬよへよ 児水

豊玉もと豊臣秀吉公を參るも猶ほ方廣寺境内ニ在秀
吉公を竹の子よへて千古一人サヘ鄙賤ト大年ト高
く開白大政大臣ト徑昇リりゆふをひよこ力とよふ魂也

竹の子よ島隣トか悪ト大郎ト去来

大郎次郎ハ曾子の通称トて悪ト大郎トかのうづよ
あよと仇名ト名をもとすと嵯峨の名桜今トの井林乃
筆を盡すト紙作リて名悪ト大郎トの悪トの字報は

了言外少極而至一不思ひやる等と作る所にて也皆
といふ又筆と心をもかねたゞて來^キ稗の鳥とぞも云
おほきよき事にて而於其上處一隣^{シテ}少隣の差所也

竹の子や 雅さに付の傳ひすまへ
芭蕉

草の間の付の傍のすきとまの歌めかどもう歌あら
やさやかして妙のかどせがかる得るあれはあれと歌へて
竹の木の一句をすくおなづくよかせぬふじ生やるふ
まよすむかと荒むとすむと用やあたのまよのよむを
ちかく余意をへてすくを辭カタハみすくとすくを辭カタハ
すの流連リュウゼン荒亡の樂ヨクの荒アラフせよとすくを辭カタハ西
くや一向の意とすむおなづくとすくを辭カタハとすくを辭カタハとすくを辭カタハ
の子のあすけり出アシテたゆせあるゆきゆくとねが次
方才カタハとぞじてもとほぬごゆくはむけてとやせの節と
又あらうとふりてうゑがへきねをたれハタケと全ハツ作
とまちあひたのめくとたゞくの句と寺タカハ一箇の名
を稚子チトセといつてよきおり得タマハシタとよきよきよ
竹根チトセ稚子人無見ムシタマハシタ汝上鳩雛傍アヒナガタハシタ母眼ムメイと化ハシタ杜
士部シブう向ウカミかを要タマハシタを取タマハシタ不一致ハシタと爲ハシタ

猶尔。以也。一也。九

中かられハ麻子の火と目と口合すばらかあてふるえ
を移しシガリ照射狩火事ナキをひくまの狩
をりきさりとりひとを猪人のるもたれハシカム
ヒヨメ火事とシカクとひよきテ麻のヤマヒトシ
猪のアラキモタヌヒリ立て深山幽谷の信玄小唐姿
みらゆ

明石夜泊

蛸巣ヤシケルまきと月の内

芭蕉

まのとくれまきとくはぬ安へてまきふづかう
をくまきとくはぬかてまきふづかのあくに浦ふくまのわ
あくやとくれとくやくまうん捨送集エリをなうた
えもーよすまのあがくまくみきはくまうり
きど猿ナフ蛸巣と燒きくまの庭ニ小サキ穴を穿
き縄とうけていとむか海底小魚のそれ一鰯の這ひて眠
アサムギ引よるつかつて出るるやまーあそみ巣の庭が
持かず松ナムハ皆欠出立とまん詳さうるく多識綱
タツノウ略も明石夜泊といふ形も津少難アリ一
えうすまく杜ふづけーがものほ不说もくつまほ
まの意を教ふ會ます向ふも出せむ夜泊といふ是の
轟か崩れると翁の方とを含むり蛸入の称りて
心の國底たる毎一をも潤の匂

君う代や能磨をすゝ鍋 一ツ 越人

君う代を聖代を作さずる三吉堂より移化四夷八島小
説で今と他まがすむ女もあつたれ、渴かつて水を口に
作ねる君う代の外五丈余りの桶ハシケと能磨四神の面
江のふ湖の東の奥ハシケ山の裏ハシケ小野庵あつて名所の面十全所にて
能磨の社ハシケ村の西林の下ハシケ四月十九日ハシケお村の
女ハシケ我男ハシケを教ハシケ土壠ハシケと化りて極不^{ハシケ}すあざでい
だよひて多^{ハシケ}の場ハシケと云ふと男ハシケの歎ハシケとかくも付せたが
神罰ハシケと業ハシケの罪ハシケすすむに^{ハシケ}罪障ハシケも^{ハシケ}セー^{ハシケ}る
は神の方便ハシケもあつとむハシケ一 塚ハシケうつて何事かの男ハシケセ
一 さとそぞうて大もろ場ハシケひづれじゆつ男ハシケの數ハシケを
小塙ハシケをばくして大塙ハシケに入ふよ^{ハシケ}て人ハシケ数ハシケかくや^{ハシケ}一 が神
慮ハシケよもよもこうびよおもくの小塙ハシケのうきいづで聖
代ハシケを手ハシケて神を祭ハシケるをなが^{ハシケ}とくハシケてめのくち
こよみのくらまはんはんハシケと温故伊勢物語ハシケあすまき
はくまのうすとせんはまきあさくのゆハシケの夢ハシケの夢ハシケの夢ハシケ
枕ハシケ佐和能磨ハシケいのせんはよその神ハシケたりゆよのうと
ゆのあきぬ方ハシケと

五月二日記す一さるわかて

卷一百一十一

端年は萬葉ふと並んで號する六行詩
である。其の特徴は、必ず六行の四音律
と五音律の合せたものである。第一句は
四音律、第二句は五音律、第三句は四音律
で、第四句は五音律、第五句は四音律、第六句
は五音律である。其の特徴は、必ず六行の四音律
と五音律の合せたものである。第一句は
四音律、第二句は五音律、第三句は四音律
で、第四句は五音律、第五句は四音律、第六句
は五音律である。

卷之三
顧
吳
芭蕉

角の歌の姿と形をもつて始めて作つた。この角は
歌聲と形容をして原氏乃がさきの姿形と同様の
物の作ることを難事だといふやうで物語の次のもの
たまひーあらふ總角の姿ハテはの秀姫の姿よりといふ
まかあるかとお寢かゆく姿ノ身みやうがの系列み
どりて必ずびりかわるとアタリヒテからうのよみをすほぐま
キヌアラキタリをむまひおめれち。不思議モ何事か
えもひげ肉モハ奈ミトムヒナリシム又幼子の姿から可
げヌウハムキリソハナリタキの象のむじひハレハレハレ
をちドホーメジムシテアハシカダハリソニトロヘ
キムシ名番縁とおて香机の四つの姿モムモヒル象

相手に歌やかずもあけぬきのまへむまひおひこと喜
ふめぐるものあるくとおちゑと歌よみを吟うて今後も
唐子齧^{ワケ}ル一と切ひでゲの童女とた一ノ字すとく白
い祖翁一句の練磨容易^{ヤクイ}者^ハと知る。額^{ハシ}共六今
云前段の下^ハ又高閣云万葉集卷之十三人丸歌小集のハ
とせをモム歌の口うみと云ふとおもゆくハセギズモア
キハ短^{ハシ}共六今^ハあると云ふとおもゆく末をゆうて下^{ハシ}共六今
でなければ放聲^{ハリカ}と振分聲^{ハシ}とすが一ノ字とよ紫
どふ生^{ハシ}成^{ハシ}ふひと上^{ハシ}へかさ^{ハシ}と上^{ハシ}てキとゆ^{ハシ}てまごば
さ^{ハシ}ぬるとアモ生ホの説^{ハシ}と歌聲^{ハシ}のる^{ハシ}考^{ハシ}古
は句物^{ハシ}の字^{ハシ}と云ふ沈思^{ハシ}て味^{ハシ}舞^{ハシ}

隈の縞乃所はふうむと一
隣 稲

江戸 岩翁

岩翁ハキ角の人ニ隈縞もよまと读ぬ。並縞
の向こ並縞めく眼あ併く

さへいーさに密人やとふまつすが 尚白

密人ひまうふどく读へ。象陽の「らむー」の情事
何事もとをり口ひ深もとくと口ひ加茂の事
をきし四月申ノ酉ヨリ一上か茂下加茂お神の事も穆
久司の事一出生もと先後一とくじ味一とくの事も
ふまん人をやくすと賤ちよーとくふせはべ

五月六日大ねうち死の遠忌城吊ひて
大坂やアマのよ草子ひふ十之四 蟬吟

伊賀

大坂彦博ハ元和元年五月七日ニ死于小寛文四年の句
ある草一蟬以ミ幕堂主斗良忠と云祖翁は人ふ仕
をきしる寛文六年の四月也以世をすかやる。其暮
か一向戒もよとみのちあとの忍ひの解りあるを一句
意も少くとも體より太平と心よ含めて十年三月
もとをとくとみ世の其のうち死するよりぬたが手章
美吉のを移思ひやれててあ後今又十年太平小
引すとやくふじよーて大坂と達幸とひきよる

ノホラトサナ

奥羽高館かて

寧子ノ子や兵士も も免乃 佐芭蕉

は向奥羽紀行の所ボーット 奥羽高館も九郎義經筆居
の城地々々今と田畠とすきみアミキ強ス様子英勇乃
名士生死の説ハシテ少少アモハ高木庵て小松を種シテ
んじめ英勇俊傑ヨウジクの名士官コ一膳の豪と隨侍する者
の説く、おもむ角を幻術の文字字ヒテアモノ

言ノギヤウハヤウ下の蟻アリ芭蕉

奥羽行脚の時羽石尾花灰とまみの佛土山山行不
足筋也され一ノ山の峰アモハ万葉集ミツバチニテ
コトニテ陸奥山とすアモハアシヒヤウハ高木庵
なみれ聖一されど此方の紫集シヅのアリヤの説後成定家
あ名も麻火庵蚊穴かくす頭服法師ハ蟹洞寺す
清浦も魚をもむか城かの屋とすアモハゲレヒアリ
今僧士け三義ス迷ひて顯昭も難陳ナカニ小用ロセリ
麻火庵の説と取るアリ本説ハたゞ阿摩庵くをもど
主をわざのアリヤと祖翁も李門イリ門下で学んだる
あるハ万葉集シヅのアリヤの説と取るアリハ
昭う説非奇とソナモ独古通首コカツシと云ふ一人もかハ

今更この況と重て 伊豫ノ用ひて一泊すれども既
ニ屋金ヲ宅みて涼しきを亦尚ナリてあまること方
言モ作一文又次ボテ言ふかひこかすやとうひ
ト紙一葉の意かうて紙も蛙の格を脱して蟬
かくすと多シ一葉も見かし 跳昭う内口ハ桂をもやエ田
苑水沢カ住ミシカテ 蟬室サンニツのトコバト翁ノシテ
翁も蟬言ナリ人やの下に住リて蟬室の下
の木下角ヒシケルニを手柄ヒソサシ一粗翁渴蟬の
能竹の赤鶴の俠士が翁小惑ツカモニシモ之蟬也春
とあすナのうちわざる三月午の日ホドメイ 来ササヘ四百
才モリ付とす翁の達翁ナ甚うれも蘭ヒシトムヒ
ナモア一毛モ以シヒシタスく蟬を巻クハシカレハ是モ
シ宅の蟬室即興の向こみカヒニ仰ク婦人のいそが
シよそくしてシモセの鉈蟬セイハ遠出オレキサ送波ホジクヒト
写ハ再び物のよきシギウ又画モタカウアトリカミホシテ底意
ハ翁ナ方小而て心ちく遠みすめ食ヒトマニシ
又蟬小引蟬ヒキの縁哉利ヒシテアモアヒトマニシ
麻大屋吸火をシテヒ向意解一がア一又亨ラヒトマニシ
望洞豆も人モ古代の聲ノ如ヒ作リヒサスの聲ナリハ
されども考合セテ騒閑ツカウカシ郭の掛合セシ深く味す胸

叶境ナヒ可ムナシムシの事也

かづかす角すアリケヨ須ニノシ石

芭蕉

詞のとくひにまつたるは原氏の毫すま這
もれ袖とかくのうりとお城をやしもさくホニモ
ふ詞とつまれてひきひきと詞もふして蝸牛の意後
りあらまみ成る「うわう」莊子小け虫の角上小蠻ミジンとふ
と觸ミヨクとふふきて互タガふ争アラリをすとつて詩=蝸牛角上
何事諍アラシキと云ひそれを取る角すアリトソリハ所現
ナテ姿を備へテテ須テとほ石と一也チ子聰コトヒコとソヌ
信言游グリゲ寓言アマガシかしてちまく小うて生毛の庄子能治を

五月の句小掌かす於てあめくモ 先兆

蝸牛と螺を負ひあめくモハ螺カタツムリす一の形と似て螺の
あまくらがめくされハ作スルセリ而降以行脚アマガシをす
時の句とこそ正極カタツムリの字有白ホホホアヒタマム
タマキホ魂カミホもハ漢名ホ蛤蝓カタツムリヒシホ大草隱遁
を欲アシテてホホ生る時の詩多年ノ貝屋一蝸牛化做蛤蝓カタツムリ
得自由火宅最惶アラシキ涎沫盡追尋法雨入林丘アマガシ作り之
け句の意と異云合せらるアマガシホホホホホアヒタマムの事
みちアマガシ

い福まゆの味あらむ空やあらう

木節

此の句をせふ双闇の句法といふを索綜轉倒互照双闇
ありと詩作の格ひ以て少すかて詩を作らんとす
すよとよアレルも書きハ俳句の上を説くもす／モホの旨
内自然より起る格これとあつて作りがる事は自立
ふるの法格つけふり生ましにほ風／一は句味ちきく云
可ひ称まると風雨の空とテ巻々び開くる句かゝく味あ
とハ食物の味ひうすまがりふひ称まさればもる風／東
風すてまづいとひふすふ風／又子有の句の空乃ますふもる
し御ふのちをあとしふ意を含て上下ふれてもるまふ
ゑゑこぢぢをあゞく、情あゞくつまじひ行ぢぢをあゞくも事無
きとふるやうて味あゞくとまやと同也俗言ふ味をやる
味ちるすとまよとつて食物トナリ半分の味をすて食味計小
ううれしきすすてあづい仕方あづい仕様ちをソラモ味は
まえちと同意ニ用がうまく仕方うまもいり成するがま
まえうそくすみうそく句意と詠中も風雨の十月行ゆすと
仰ておきてた中詠義あるかすり也と風雨のうち詠副歌ひ詠
春の風あまく味あとソラモ味とぞ風一

乃謂次第有之也

史邦

ヤーこの名西家の神社へまよひんといふるナのまひんと
詮義ナリて行カレ、スルハ山坂詮而行アリテ
彼モサク御ひ原ト行カリて墨云を果タリ意也ミハ有
シのセバ御カトミキナサドリ凡雅木節史邦の三人
皆旅情ナリて詞もあくとも味也

奥翁名取ノ郡入て中野実方が塚
ハレツカニヨリ移侍れも道より一里守
たまえたの方三島也ソラマサヒトサ
アツカニム五月可いヒリナム
ホタル

笠島やいつこりみぬうり通芭蕉

奥内行御の匂の中將實方ハ一条左大臣師尹公の孫侍従實
時の子也右中納正四位下陸奥守小任——長徳四年十一月任國
かゝて卒すくみ行成と嚴上にて口傳のゆりかげ行成乃
冠を笏ヲカニシテ主上ひき承後せら事ニ實スリを
希松スルアリキトモ陸奥守小任——つぶれつぶれのまえ
うきうきと心をもつての家小西行上人ハキモせぬを名をうき
うきのまえ今ナホリススキのせしとてりてもやくねとんいとこう
をくとひよハ家とすゑすゑといじくとす、せと同

うのむすへとりよせこまくは無窮ムシウ、とおでりくあらが
をどりふ不同ドリフ、されば家ハシマかきよ別カキヨベツとつよ義ヒヨホーとてアリ
ちくすむるこゝの意ヒコトノニテをまわすと無ムシすほんと
シやみ匂ミカニのぬうひまて見ミルらぐむとつよゆすきふま未集
みくらうひをせりたふみみそくじきこほの仄ハツのハツ居
このふ意味ヒコトノニテを用ヨウす、又家ハシマのこゝをかへし意ヒコトノニテ
ひつまうの言ヒツマウすけを角カタマリす

大和紀伊のオハシイじとうをサハシよて付ハシマの行
れをハシマめとす加カマくやまを科カタマリついた
了紙リードのリードみ書シハシつけ竹チク

アシナリとてキサハヤモロコモロコ 去來

さもあ根名莖ハラニシタの科カタマリ代カタマリ足ハシマ神錢論カタマリ生
たる字サトて俗言カタマリとすよ同ドリフアシナリとてアシナリとて
アシナリとて俗言カタマリとすよ同ドリフアシナリとてアシナリとて
アシナリとて俗言カタマリとすよ同ドリフアシナリとてアシナリとて
アシナリとて俗言カタマリとすよ同ドリフアシナリとてアシナリとて
アシナリとて俗言カタマリとすよ同ドリフアシナリとてアシナリとて

根名莖ハラニシタの外ハラニシタアシナリ

歴ハシマ剝ハシマや一折ハシマよ金情カタマリてや日ハシマ雨ハシマ 元ハシマ北

金情ハシマハまじよ讀ハシマ一字彙ハシマニ精ハシマ也ハシマニ精ハシマ也ハシマニ精ハシマ情ハシマの

誤字も時代の通用字として負担紅梅を句可頼
句より力のなきじめはゞき金精はくとよ向きてせび
と仮名と付く五月雨ハ黴雨ト云フリのよ黴カビと生まる氣
分の雨水も齋かやまつゝんらと心ふ念ニ又現す聚
利も錯をする時あるハ一枚子清てて眼をナキアリ
ア自古の黴雨をモヤと稱する也

月の道や葵竹へ月あれ

芭蕉

寔よつよ葵ハ和名ひまつり又からあふじとりふとの漢名
向日葵カクジツキ一名丈菊ヒタツイちをち漢土まで葵とのりゆふとひけひ
まつりのよすかて葵能ハサウエ衡其足フチといふ是之和名の何故ハシ
覆カバよつよ養カバすつゝうだの花日に向ひてその足モトを向ひ
がくをと云素カバすつゝ名付カバる賀カバ莊カバのよきよきよよハ野カバ
リレカバく也カバありゆいの名付カバて葵カバのよと用カバわすオ葵カバ
にもなりカバば向カバのうと徳カバを取カバくば向カバ素カバもと母カバ
の産カバでよきたる日熟カバすアズカバづくぶつあ日カバ色カバ一かずめ
た彼カバのうとよとそがや日熟カバすアズカバのうと向カバて
終日也カバとばくも葵カバすをとれぞとひふくと極カバくと
ひみ字魂カバやく年月日のみにかきゆく食カバくと日のう
やの五え字降カバ人のち出カバを舞カバくと覺カバくと日のうを廢カバ
ひぐは天地自然の至理カバく一切の生カバと得カバるとの有情カバ
非情カバを本カバからむとけのひをもとめざすか聖人の言

道あやまちせぐよしむら
羽紅

は向様端からてう手の室具と備えとひゆ
羽紅尼、御めすようへようひすむ匂ひ者
通了徽雨とあかびとすま。徽雨シタウ十九
日もあくとまを湯浴く仕立あら白玉、勿角併気とよ
じきやくは湯を食して鳥せき絶えうちやよどる
男ひきりふきとゆすあ。三日外あらし匂の如く
はつくとお風ひやつよお婦仲居のゆきすあらし物足
九地高あの小ちがむとせりも重ひ命せら。

二三月の事あるまい予はひつと向毛毛にあ
先駆るいすまく時もまたふるまなむ人を
あまきりそれも氣のめしゆへて
古事記されあむ事毛毛といへとかゆ
ぞうりとも

六尺の力才十九歳あり其角

みまきりと死んでいはむかしのなまの時
死んで人間七十古来稀といふ句よ
稀といひけ句又極端少へて力才十九歳あり
て六尺の老齢ふねまつて駕をかずしめだあれ
えと自らと重ねて所を改めことを駕のみまきりと
見て猶惟情思ひがまむ老齢のハ村田忠菴

百姓も重みみれつゝ笑撃の言 去來

以久んく已く生業とつみて鳥をもと底意を食う
茶の品そぞーく喰ひて茶の芽つむじて百姓もとや
茶の種乃はくらべてそののを特あるとあらわす
ハ久からざりぬれつゝと俗傳するを嘗て向毛
又喜捨すくらべて里ひやれて喜捨すくらべて喜捨
のうううむなむ趣一ものいそーき中ふかすもとて唱

音止や傳へて字やるあひゆ

トトロモタツ山ノ内山よ婦元 正秀

近江滋賀樂の里名所也何よりも一言下高代り
まうとまキま婦の鬱乃豈翁の子也其俗衣と云勿ナス
て多ニ多キの小佛竹有て塔ノ子合てたゞ茶山
ノホリと俗語ヤその地の言也

つうみ令の子たのとせや東白田 游力

お牛持ト瓦兆云はま富ハ麻切アラモキノ去来曰暮
麻スナリテモ暮カナリモ苦一ノハシ漏洩先師云

又ふまゆれみの福か一ガナリ制一タムアズノ人暮
セヨト云今猶もヨ去来ラ生麻カナリモ暮ハモジ
アリヒトテ深意行リ祖母のあらすあれの福か一薄
ミ制一タムアズノ上の福ナムナキナキアズノ人暮セ
ヨモ書ラハ代の解教エマミ待テ湯屋ノト前海一此向
眼筋ル一ア解説をア瓦井ア多良俳室ルヘアカ
の翁之嵯峨日記ナ廿日少陰晴の家ノルト羽伏瓦井
去年途中の事モ語リシモけ局を記ナリアシハ妻富
の哥ヨアタのアキ年ナキナツモアシナシニアリ
背中カ負ふ事の医生モアリシナツモアシナシニアリ
妻の船のアキレ顎の乳發行トモテ生ム成ヌ一

弟すゞ可摩一も眼前實子ナニの童子よ六岁
なり丈ナリふ字魂ホーとまは島よハ居着テ了麻子
ちとすゞ幼れぬこすして麻島ヒーハ風姿モ一擇燈の
まよく味ふ毎一嘆惜日記去来物ソラモテ去來ト向く
集み游カト坐すハ也ゾモーとく爲ト丈ヒシ字魂
足バ麻子モアガメモハ丈ヲ高キを理屋ホガヨリ佛士様
端を知レタニ争端不思トヨモ之候位ソヤラルハシモ
終一諭言モ自得多々一摩子モアガメの端と割裂モ

孫を産ナリ
吉永家ノ家ノアヤウム 司陸 智円

孫を産ナリトシテ娘也不善の姿情ハナリ吉永家ノ孫
のりナリモジ西母不接テヤえんと化サリにて孫以産ナリト老
尼のよしにたハむかはヌ母言外小也ソラモ司陸ト其子李
あーて枝からくよき緑青色ホーテちへナキ也

李生才年丁能ヒヒ山家ヲ花 紅

山家も李作をホークシテの李根豐にナリカモ收ヤ捕
又難近ヒ嘗テ七十才の豐乳化ト言外不思トナリイづミ相
至ク海濱ちかニ山家よハ異の事ナリ

さく川の闘シえて

芭蕉。芭蕉の如きは、やがてまた國極に

聖流より二毛丸姫と同一のやう本尊を白めた者、^{シテ}其事の
巧了風がござりて身の一般には歴るうかまく之れ深安
と、姿のありとあらざる本諸物のやうふ動きて姿とあります也
聖俗よ、一船の如き廣々と上下下とその姿形も心情
もさす物も一樣小ちとぞありて心懐とあはれと仰慕
する所行まるまゆゆ駒れちふとし小美こ御家の心像
とつゆ流ハ昔すの心うけ残りとぞと水の麗れ
けふやみく昔の舟船が残りはりて居るとお意見医後
ちど云處の字義も同一風雅とハ風の正^トをとす
祖翁の聖流の娘と化すふ底意と華に失して夷小
りもいつてかく繫華の土地少古也と残り教へ奥
羽の大國都へ遠くして古や古雅能^{シツ}素の俗俗
に残り侍りて鎮守府以東の僻凡と云ひ合せらるる
多^シ事^トすまひ田舎唄の唱^ヒと古心^ハまだある事^ト
上で唄^ヒと矣羽行脚の心^ハ足^シ心^ハのぬちりと云言て
ひゆのそしやまなり田舎^ハうんといふ事^トも有り
とあらぬ^ト或説小美の田舎^ハ昔生佛と云^シ法師の
化りて人^ハ生^シ又^シ精業^シ其の事^トのみか心^ハかと云
まのナハ^シ事^トあらむ^ト同^シ於言に田舎^ハうんといふ事^ト

まへ一即て大代のくじひ傳へ一祝ひのむけみち
のくじひ種ふより起りてうらむさよとあらへく御
吉原あらきと堂をも心事一匁のすすめ能をすね言師
のくじひより生れも翁の匁の庵きスあるとぞくして御
曉すやう小向化るゆ云妙とくづれがいとおまえ
き従く生佛と能をまつち持て峰山流の家業ふつて
一向のまづま風移の本質思ひやうば向不裏深きほん
手益しよべし誣て古據^{トヨ}とねて解^{ハシル}は時ハ逃走^{ハシム}タ向
却て手弱くあらとくす角一匁情首尾貫通^{ハシマツ}と
以てキ要トあす^{ハシム}

生羽の穴上とみて

眉掃を面影みそくみ形の也 会

出羽最上と紅花の名産の因て生羽り眉掃とよみ
ハ化粧た具のうち眉つくり眉掃をそよみのを眉掃
ハ白毛の心^{ハシミ}一筆のゆくやうに先のわくにゆる紅花
ハ薊^{ハサウエ}の花乃如くその形眉掃のゆゑとおひの化粧なり
の眉をまきを付ふとせて墨をとひふと面影^{ハシメ}にてや
とひぐくもかみふと化粧^{ハシメ}と紅花^{ハサウエ}は化粧^{ハシメ}のまゝ
のがく食を面影とし所縁の花^{ハサウエ}あす薊^{ハサウエ}の似てあつて
くもあらまのあらま婦女の化粧不用^{ハシメ}とよあくボシヤ
とあくボシヤくまつま作りあらま

法隆寺開山聖教仙の太子を拜也

序
袴めもつをあはね
みやびのむ

辛那

大和の法隆寺すもせ佛の太子ハ聖徳太子ニ紫の僧侶モ
ノテ沙彌戒を受けるもつゝアリ多羅のモト化れ殊勝カ
ヒあらまきのみハニア外モ乃クアリ

伊賀守
萬葉
當那
我之敵也至
因

伊賀
方

去年お云ひ句勧めし所の斧正^{アキマサ}十九把^{トトロ}うち九把^{トトロ}匂^{ヒメ}猪^{シバ}
櫻^{シラカシ}の内九把^{トトロ}うち南^{ミナミ}五把^{トトロ}除^{ツル}金^{カネ}一去末^{エンド}云^{ハシメテ}三枚
かきり堂^{カキリドウ}の先割^{センザイ}取^{ハシメテ}の瓦^{タモリ}毛^{モウ}サ浮^{ハシメテ}毛^{モウ}不^{ハシメテ}許^{カケル}
流^フ仰^{ハシメテ}北^{ヒムカ}ナ^シ拾^{ハシメテ}まか^シ人^{ヒト}幸^{ハシメテ}い^シ伊賀^{イガ}の句^{カタ}お似^{ハシメテ}も^シ
多^{ハシメテ}を^シ車^{カーリ}一^{トトロ}乞^{ハシメテ}う句^{カタ}と^シもん^シも^シ破^{ハシメテ}方^{カタ}守^{ハシメテ}う句^{カタ}と^シ守^{ハシメテ}引^{ハシメテ}
云^{ハシメテ}あれ^{ハシメテ}く^シ宵^{ハシメテ}灰^{ハシメテ}眼^{ハシメテ}あ^シの^シ糸^{ハシメテ}毛^{ハシメテ}絲^{ハシメテ}小^{ハシメテ}よ^シ煙^{ハシメテ}風^{ハシメテ}雨^{ハシメテ}
アリ^{ハシメテ}但^レ九把^{トトロ}因^{ハシメテ}の^シアリ^{ハシメテ}と^シ家^{ハシメテ}を^シ献^{ハシメテ}う事^{ハシメテ}

善江の曲水之橋か
堂火や、いと、巧手了、管の如く
去来

脂夢の曲みう機上ホアの吹テ 夏の夕ニ連雲を拂テ
空乞ノ葉未久の湖の歌ヤ奈色言外ウタリテ以迄
未れヒシツホ小津多情備ハリテ魂生耳ナリナル余

詔つよきひくひくの風一吹の風と山の湖あとさう
へきのやまと作りてほそみと心ふねまほの風

警因の室凡二句

雪の初やまだ江生も室ゆす 元兆

は句実情の場かく三四メの幼き年の以連て嘗尼小生
もすすみ家て博士吉よ鶯鳥て臣生もすすき幼年
実情やして雪舟を遠きよみに食ふば毛して連き
本リトモ今も達あをよみと堂安とよふ大人すく小
児きアの教し子と母すみじりゆく一粒兼好の之
に和寺の僧徒の三鷹かむりスモスの興あらざんケテ其
さかのまんの付ヒタ怪山ひ生さる一句に古意を
通着しとふを

ほどのやや船影碎ておほづれ 芭蕉

乞又実情か化りく匂之船影とよみて同くく安山茅ち
よぬすすく碎とく掌櫻ふくく茎を束まし草木と草木
がよすて曲弓堪易之茎を束まし心をもつてぬすす草木
ソラ義ヨ同く一言小葉えぬすす草木碎のぬらと差モ
桜姫ことあを一言外洋特種スモヤシ

三鷹の詠

當山よりやつておこうすと、鬼尾谷

長崎 田上尾

ハ鬼尾谷より無事山中の草木を刈り鬼尾谷へまよひ尾の
字を鬼尾の走るよりと抜合せしむれども鬼尾谷と
おそれまう草の走るよりとくればべとおぞくるをかが
たまとのまちうさをすゞ拂へて思ふんと家早とまは
むねをすく異はざまくがまき

ああうちふ鷺とせうらとみゆめぢ

尚白

づましちハ強のまと取らうてとひ、すまわれがちとすま
うてみは聲穏とあれけずかひじ理とほんとまう
鷺と鷺も水中小魚を養り食ふものあれとまうて鷺とせ
ア合て魚と取り食ふかみはアくみとひ意と一鷺の鷺の
性と自得一かぎりと鷺の性と自得一て鷺の性と自得と
ソムシトヨダーベルナムニ已がからせうるをとて海とす
含むとて

草むとや百合とゆしの白、半残

草むとよしのととびととびととびハシテ半百合
百合とよしのととびととびととび百合の花のかくととびととびと
ととびととびととびととびととびととびととびと
ととびととびととびととびととびととびととびととびと

百合のむすびと接する所田代てひと丈もくとて目を
つぶす。まわの東とうふ魂さればまむかのゆみが百合
ひやくともうとよ魚つまふはなぶらむと云ひ

病後

大坂

空つアヤカツアツと百合の也 何处

空つアツ上浦つと南一高橋逆上すと百合の也
の匂がちあると小舟全て見ゆる船もかどる
らしくとよふやうじだれつとましらふづん當す
色上げて一ノ木橋す一葉蓑ホウ颶ヒの小古人の舟を
見ゆ

お風やかずせふ百合の也 ひ弱

先よりふ西課すとすゑーう言ふと遠くのまゝ草す
そよがまよめよめよめよめよめよめよめよめよ
百合のちハカラヒトヤツヘモシテモアリトシテ
諸々の起り。まみハ言外よぞう百合。よみよあい
の聲うべかちてをうよ風きよめりよすせうよま

焼政辭を化りて

手やあさんと手の母と母の娘、嵐蘭

焼政の辞を化りてよ暖向こくとハ破せせをの

中の乳乳一ノ故の嘆かむとば母もすく服ひやうまゆ
仰かむえまつまきまき山上臣憶良う歌ふおぐら等を今
まくらんるまくらんまくらん母もあとアツシム子を
みて作らむつ便之詩の文と風俗文選みせむ

餓 別

唐房

立ナキや故在むとくぬ孫のヤロ 里東

立ナキやハ孫のヤロ以テ立ナキやハ孫のヤロ族のヤロと
立ナキや故在むとくぬ孫のヤロ向ナシテ立ナキ善作
の海作立ナキやナシテ立ナキとは立ナキよハ多々佛得
の厭別立ナキ多々もの人の族中立ナキ立ナキと曰ナリ
立ナキ別立ナキ立ナキは向ナシテ立ナキ祖翁の心流
又家立ナキ立ナキ立ナキ別立ナキも情深切立ナキ時も
解せよ後立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ
心立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ
因て立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ
サクの深意立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ立ナキ

うとく成人ふつれて

奈官さるに徒者ふれむけ

みしりう歌と吉次う翁若よ若翁哉

其角

うとくある人とハ俗諺の金銀財宝よ富て何ひと

ふ至のるす人成る之徳りのうとしよすらうべ
有徳とかくこゑをまことは伊勢太神宮（伊勢太神宮）
すをひふ從者と家僕の通称（アマシキ）れとひづきられと云
すをひふ主人の徳ふれはらうと云意（シテ）吉次（吉次）
条（アマシキ）大福（アマシキ）者（アマシキ）名を擧（アマシキ）信高（アマシキ）と云毎年奥州（奥州）下
金商人（アマシキ）後（アマシキ）美経（アマシキ）に仕（アマシキ）武士（アマシキ）成て姓名を堀彌（アマシキ）景光
と下（アマシキ）給（アマシキ）て此の郎黨（アマシキ）（武富許林又俗傳云吉次末春と云）
を金賣吉次（アマシキ）不^レて從者城の冠者（アマシキ）化り周禮に男
子二十^レ而冠（アマシキ）九巣以上（アマシキ）の稱（アマシキ）本邦の制（アマシキ）女
ノミ（アマシキ）冠者（アマシキ）正音（アマシキ）に稱（アマシキ）時（アマシキ）曹子（アマシキ）の成長の稱
と^レ冠者（アマシキ）御名（アマシキ）異端（アマシキ）時（アマシキ）壯年（アマシキ）の從者（アマシキ）と云（アマシキ）
能相（アマシキ）ちよを郎冠者（アマシキ）と云（アマシキ）称（アマシキ）相向意（アマシキ）ハ今サ
ノ名稱（アマシキ）惜（アマシキ）而固假（アマシキ）かさんと思（アマシキ）經（アマシキ）おのち（アマシキ）もアヤ
名稱（アマシキ）ソシム吉次（アマシキ）冠者（アマシキ）といひも一將の固假
もアヤ（アマシキ）七え氣（アマシキ）と向夏（アマシキ）の氣（アマシキ）と古次（アマシキ）冠者（アマシキ）恨（アマシキ）
れ（アマシキ）而祖翁（アマシキ）の固假（アマシキ）入（アマシキ）氣（アマシキ）と向夏（アマシキ）の氣（アマシキ）と
恨（アマシキ）と^レも氣（アマシキ）立（アマシキ）氣（アマシキ）晋（アマシキ）再舉（アマシキ）と記（アマシキ）
まのと（アマシキ）和持考（アマシキ）也

障門や登の生てり耳乃穴 杖艸

冥怪の匂（アマシキ）登の生（アマシキ）代障門（アマシキ）と化り^レやて登の
這入（アマシキ）うちの氣（アマシキ）田（アマシキ）いやされで^レ外（アマシキ）す^レ障

ひやの五文字魂くくゑをか

下宿や地虫をさへ
せう乃ひ急一
嵐雪

虚を化りてあらゆる事の言外を悟る所也。予今
よりせよもとある事の妄念は妄の心曲れら枝葉など
口角を伏りて先に序を序正をもつてかくこと
アキモト因て人にも及ばず。而して口も舌もやさむ
まきは自ら生まつて是のみがまの以貞徳^{ヨウドク}非聲^{ヨウシ}
の号成續^{ヨウジツ}アキモト佛士に乞うてよしの方小曲^{ヨウタニ}の枝を
採ふ。然^ハは句^ハ其^ノのねばやうもく^ハ其^ノ枝^トす
てほんと豈^シよ生^ハあるがゆめ^{シテ}一^ハは定^ムす
よりうへぬれ^{シテ}疑^ハ其^ノ卦^ト不^トあり^シを句^ハす
とかうされバ疑^ハ其^ノ卦^ト用^ヒて^シもあ萬^ハて外^ハ聲^シ
ある^ハ萬^ハ凡^ハの^シ方^ヲせ玉^ト採^ハば^シと^シた^ハは
まきと實^ハ採^ハば^シと^シた^ハは口^ハ心^ハ以^ハあらと^シと^シて^シ化^リ
あす^ハ草^ハ門^ハ口^ハ併^シまつはせ^シた^ハは^シす^シと^シ實^ハ采^ハ
枝^ハま^シ定^ムて云^ハ不^ハ虛^ハと^シか^シ今^ハ言^ハ不^ハ虛^ハ本^ハ
ハシヤ^トと^シる水流^ハを^シ含^ム口^ハ化^リ今^ハ口^ハま^シで
す^シ黑^ハねど^シわふあれ^シて黒^ハ生^シす^シと^シ虚^ハ空^ハの傳^ハと
さかん^シす^シと^シ言^ハら^シゆきく^シ詩^ハも^シ格^ハ李^ハ白^ハ
白髮三千丈^ハ虚^ハヤ^シ愁^ハの一字^ハ實^ハと^シま^シ白^ハよ^シ

宿子や兵士もかゆみせぬ

醫
探
志

お搖り舞ひをよしとて客をうておもむとソシ
宴の場とすよまへかく向意は行路近き大樽や様の
お君が客のまゝ一内本うつまくて居正代かく又は臣
さるハ客の馳毛やと興へるの意

歌と死ぬ歌ハアハアと桜のすす 芭蕉

歌とハやがてと遠しとよきよみと解とよめとせんと
さきよとぞりよと同ー景のやがてハシマリのひびと
リよ義よとて近づけり俗語よ同ーいづき間のゆゑとす
きも夏の桜が秋ふすてたちよもじ延年もわざくわがまい
ノノ盛すら立たずれハ中へ死きる氣色ハアノなどひ
乙の小死のゆく年と業と時と刺と死期の近寄る
と更よきハアてる年と子年と余のひくやうと欲を極
むと彼の晝夜の様の狀近く死ぬれすでゆるなみ人を
虫と同一自得に安むるの境チトスと夏の桜のやがて
死ぬれ立たずれと美ノ才已の時と刺と死期の近キ
れと悟らんと佛の心とがだかくアホ様我歎す
るより終はざるあれと一一小田ひめぐれあれと
たとえふアハ

三衣と死と麻刈のあとの事 槐市

25向左翁の桜ふちもとて生む向にてあとの事とよ

伊賀

魂をうとす身一匁意ハ麻衣の刈込時ち聞者を無目
のりも人を交りて刈居る代乞ひ化れる匁より一底まへたま
立處人界へまれ生て惡白代乞ひうるすもあらむ業園の
御子自らいとあるたゞだつて裏刈りすは生本にと麻刈
アハサギアサリのあればき人并木交りて刈る
海玉あそれや六歳の玉の朝日待すのく雪厚生ヌ生を打
てまの跡るをよ哉ア森で食ふを求すアハビキとく
食ふおとまあくのあれハシキと墨し合せてあとの玉とよ
泰玉やと云生せよつほの傷きし又麻小育麻と云ふが
說小育經ニ尋向表と傳すなく化リテ底意の傳意
ときすやまよつほ蕉竹乃肝要也

渡り翁一藤のむぢまく流井 元北

摩りぬかと云ふうひと向の氣をよく小橋となり見る藤
にてあと藤の花の愛をか氣の付てその流域歌うとわ
は言外よつてよつて藤のむの傷とあらべ

子の妻が唱へう合歌のも 千那

も小ねゆく魚に福ぬうれあとも娘をうひ極てせこま
ほといよみ丈の曾孫は思ひませう称むと想りうれ又
脊児すりとよおて妻の曾孫とソラモをふすと見事一

白司空
董文正
日の出

史邦

タヒト一向の事ノ事ヤサセノ所ノ時ニアリトシテ
ハシマカニ立ツテソラノ魂ノ日乃タヒトニ入余の體ヒタル

素家少嘗之蓮也烏

白雨や蓮一枝の持てよ

嵒蘭

氣質の弊、を黒ひて隱遁の情を含み持向かし西を
せりものに向意へゆか立の豫とつて称て南山山蓮の義
号一ねりうだかむりく清々庵一月はよせか持すの方の
うへやとすを喜ふ一アガルモアア持すの方とせんとがたま
を蓮をかむりて清々庵か向化さんとサード

日燒肉や時々つぶあんぱん

日焼け田の署中懇意に接きて田の水泡立拂^キてあ
る事亦一にて破^{ハシム}きをもつて云々、記而云
破^{ハシム}たる語之向意ハ日焼け田不時たま性の力のれを
くすやうがはせん司や乞うる^{コエ}て云々不思ひやうと云ひ

之言外小博通りて是水の赤とみは泡玉を毎尺二寸半
署者子の空情とや清潔とすが紫色こやよく晴山色と
とつふ而沫有とぞも多角一

月の星有るを
盤底乃
蟻孔
九兆

蟻モラはすむと利す蠍ハツと熟字モルハツすみてまし乍ハタハタ
訓す又アシテも訓アシテがさりと云ハタハタ、姐アシテの少キアシテの代アシテを
が持アシテ木アシテをアシテ小網アシテは猿アシテかげアシテ如アシテく生アシテドアシテとす
古アシテトアシテ云アシテ雨アシテ陽アシテ小アシテよアシテて生アシテトアシテ日アシテとて死アシテと云アシテ向アシテ癸アシテ
天アシテの雨アシテつゝ日アシテとて浴アシテすアシテ盤アシテの左アシテの乾アシテきりアシテてうらとハ
炎アシテ署アシテよ乾アシテけアシテ底アシテの方アシテに陽アシテを含アシテてねアシテかどアシテ而
すむアシテれひアシテと生アシテトアシテ身アシテと云アシテおアシテ月アシテと生アシテる
盤アシテの一アシテ中アシテすむアシテの生アシテとアシテハ月アシテの暑アシテきやアシテいとアシテうざアシテい
きゆふ言アシテかアシテつアシテ姿アシテ情アシテとアシテ水アシテ鹽アシテとアシテ體アシテ少アシテい
穿アシテ積アシテ少アシテい向アシテとアシテあアシテる

水
計
白
異
之
亦
人
當
不

は向かつて此解説のみでやつてゐるがヨーへニテ
その説をもとにして五名の外題も本題も含む
い合ぢてあつたアキルンと云ふアキハの音也白異つて
合ひやすあるがまんのまのめもねむけばさうかひ思ひやう
意ぢ

日の岡やこゝれて暑す牛か舌 正秀

日の岡や山城玉宇は郡まで京と大津のす一里塙の西の筋
じこぢれていゑこゞきるあひりふくね玉同ーあくまの略語
トトくこの音通す「の字」が去てこゝを計りむせんばくれ
移言キテこゝれは俗諺の「水」が説シ多一略も家みし
品物つりみゆくと勞レ心ちくへむ苦ーいさむあみをす
牛ハ暑すふゝ苦ーむすのヤーフリボレテ舌をすーて
身もすみ具わづかみやうて重着の負ふ持孫四ひやら
る河の岡と云ふ焦るとかそらつせとよるもふまふぞり
岡崎ハ四方すらむ霞ひて夏日ハ殊に風とあひ

すす暑者ーひ辭ふすれハ妙女乃前 本節

ひ辭ハガキつりくあひの毛の抜けハラハラ五三節すこびアムシ
持持ハサハサ立出ハタハタすとアムシ暑者ハサハサーひの句假ハサマサのサアだら
アレハとひ辭ハの草ふされ、辞ハの草ハ毛うかるとアムシ持暑ハサハサ
増ハサハサすと云向ハサハサく妙女ハサハサーひの句假ハサマサのサアだら
よりあれば持持ハサハサの恋思ハサハサーひ辭ハ前ハサハサの隣りハサハサとす義ハサハサ
垣ハサハサハ限ハサハサとすの偏語ハサハサ

あねんこの恋思ハサハサくゆきあつり

野童

あねんこひまのま闇ハサハサて遠ハサハサー山原平岡生ハサハサの聲

竹の一面子天然と枯る枝がむんざと云く伊賀外ハ五十年ニ
一木を嘗て実をうて終る枯る木の如く本草よりアマメガ
せんニシテ自然枯る木ある今一山坡路傍ふすむ竹の
枝葉あらわら枯れをアマメで日中ひままで竹をうぶ
うぶゆか木枯れ葉を以て束する殊文ナリテ言ふを
云ふニ一面の叢竹亦らるる有ね足してやと暑い紅梅子
向小季子以て向ふせんじの子めの竹の子めの木と云ふを

タケノ子よりれてつゝき暑者ナガ

羽紅

笛うづみの音にタケノ子せし和音有りタケノ子の音
アマメ時節の音氣ナリタケノ子の馳走ナリモコホリ
ものにててつゝき暑者ナリテアマメの室ナリヒムヤス又原
氏タ風の書が伎りて丸の扇の上ほの君を森井
アマメ六條の歌をあの屋へもうつてうつてうつてうつて
も庵主が食ふを

青子子ハ陽入ちやんあ内ヤ奈

江戸巴山

向日よく晴テアマメの音うつてアマメたゞバ暑中は
高臺青神はあきて見る事もあらずされハタかみのうつて
のち庭草のみ水多さなどアマメ涼風も清ひかずまます
詠歌アマメと云はせてアマメの風の風と博がうと四ひやうと
も青子子ハ陽入ちやんあ内ヤ奈アマメの風を含てすやうよつて

手すう方すうりをひてとまひゆ
すう去すうりとアツミー候す

すまき人の小袖も今や土用干 芭蕉

手すう去すう姪もまた一男の生まみのえまかんと脣
情まつてすう去すうおの中すうの土用干 すうあむひばくと向
こよれすうとすうの感情傳傳傳トアラシム今や土用干
すまんとひじくとすうと

水無月や秋やといぬ夕すみ 嵐薙

翁やくし翁やく日暮の夕郎の夕郎翁の道すみすく
翁と虚室の傳伝ヤテ解説をさせよづほこの翁やく
翁と云う夏すみをシトヒテアラスレウカアマドホ生ハシタ
トキカア後すみをシトヒテ納涼もしたのみ外ハシタア解説
翁と云可禮ジトカドヒテ夏すみの窓もあらわす
じかれハシモ涼え情移ふすア

さくらんぼ詠きハ涼一な夕一ノれ 宗次

宗次猿も採采時一向入集と歌ひて歌句冷々集
どれをかすり一夕先原のいぢくのうき野くあるがれ
と宮ふけふ一もやる一もやらくに居共ハ涼く竹もと
ヤ先原云多匂い今の方小化りて入集をよとのひよ

去末折ふ又アム

古事記傳
古事記傳
古事記傳
古事記傳
古事記傳
古事記傳
古事記傳
古事記傳
古事記傳
古事記傳

卷之三

ばまぐくの字もりて讀アア 僕^{アサガ}の家と同^シニ陸^{リド}緑^リ
茅^{タガ}とよを略^スるや^ハまだら^ハ生^スる茅^トソ^シハ行^カ
家の^ハ度^スす^ル度^スす^ルの^ハと云^フ義^スして^カ象^ト云^フ心^ハ含^ミ
林^ト走^カりて^カ聲^トと^シ詠^メて^スす^マシ又^ハシ^コよ^ハす^ト
涉^ム一^トあ戸^トえ^ス向^トあ^カび寺^院の門^トかヤ^セな^モ
卷^内シ^カヤン^シ大家^の門^トアヤ^シく寺^院作^馬の^同事^業
教^ムやみ^シな^の経^モも^シけ^リの^おま^ハせ^リ行^カ
いつれ^ル馬^トう^カて^カ休^ムは^シた^カひ^カる^カの^是
おの^ハつ^ミ田^トひ^カて^カ大^ハの日^ト暮^スめ^シよ^カの^者

居子臺ノ兒の才氣

千
那

手習ひふ因トシム事アリテカタハの如クセ思ヤム
行鉢 や 沈の窓 カ 床 稲 一
六月七月被國令の月待の句アリタ兒ハ許不矣
児アラルエト洋の児モニテリの眉墨モミモニ心又食ヒ
影の多ナケマシヒハ化也シノ精ハケヨシノ御子化形
の多ナケマシヒハ化也シノ精ハケヨシノ御子化形

タクレヤ 元並ひの雲のゆ 去本

元并ハ元山の并いの形と云ふがタクレヤの五文字は
タロのタクレヤトテアリタクレヤルノテタクレヤ

タクレヤ

タクレヤ 流入へ

雪のこよ今のは處々似て物 大坂 之道

詞の如て流は入る事なく向き逆下て進む一入へ
先ツは湯山と曰ひあせ頭を回らしてまのまの立一成所
の形ハ山え山の四明山獄かやとが一向かへぬと従事へ
アキラム松井山外小笠山の山ハ今もアキラム松井山
ひじきこよの舞

